

はこだてと 外国人居留地

はこだて外国人居留地研究会(代表:岸甫一)

平成25(2013)年2月1日発行

平成23年度「公益信託函館色彩まちづくり基金」助成事業

街並・文化編 〈目次〉は巻末にございます

編集長 清水憲朔 / 大西剛

編集委員 犬島康文・遠藤浩司・岸甫一・酒井嘉子・佐藤稔・千葉敬・三上浩司(以上執筆)、石郷岡武・岡田弘子・小川正樹・岸伸子・田村和子・土田秀樹・中島肇

執筆協力 佐藤公治(佐藤家具店)・町田仁(「函館の古建築を生かす会」東京)

資料協力 株式会社五島軒・市立函館博物館・函館市中央図書館・社団法人函館文化会

図版提供 記載のないものは函館市中央図書館

図版は不許複製

北洋漁業研究家の故會田金吾は手書の史料集『箱館開港期に於ける築島と居留外国人(平成1年9月)』の冒頭で「特色あるまち—函館の生成過程には、大きく3つが挙げられると思う。即ち①蝦夷島の政庁—幕府箱館奉行が置かれたこと、②箱館開港、③北洋漁業の進展などであろう」と述べている。

本編では、開港から大正期までの西洋文化の受容と日本化の歴史を街並の変遷と共に見ながら、函館の「生きている歴史遺産」の可能性を探りたい。〔清水〕

北日本唯一の開港都市となった箱館の諸相

関東で勃発した第二次アヘン戦争に強い危機感を抱いた幕府は、安政4年(1857)3月、日本の貿易=国富の創出を掲げ、ついに鎖国体制からの脱却を図ることとなる。

安政4年閏5月、日米(下田)協約に調印、箱館では安政5年6月よりアメリカ人の貿易が定められるが、すでに安政



外国船で賑わう函館港。明治15年(1882)1月『函館真景』(浅野文輝編・画 静光堂)

4年5月に箱館奉行村垣範正は杉浦嘉七ら箱館市中の御用達に御備金を前貸しし、アメリカ商船へ醤油や昆布など食料品の輸出を試みている。なお村垣が箱館奉行として在勤するのは安政3年10月であるが、江戸を離れる前に開国積極派の老中堀田正睦が外交専任者に就任している。

このような時期、箱館市中は工事バブルの様相を呈する。弁天台場築造に加え五稜郭土塁惣堀が松川弁之助により着手され、津軽・南部はじめ全国から人々が集まる。修好通商条約締結

の前年である安政4年、幕府はアメリカのほか、オランダ・ロシアと追加条約を結び、11月3日長崎と箱館の貿易開始を全国に宣言。箱館郊外亀田では五稜郭と交易会所の建設など開港都市新箱館が計画される。貿易開港決定のニュースは欧米諸国に瞬間に広がっていく。

貿易の開港はキリスト教文化に根ざす外国人の風俗など西洋文明への開国でもあった。安政4年9月に追加条約に調印したロシアは同年12月、領事と共に司祭・医師らを箱館に派遣。安政6年1月、開港後では日本初のキリスト教会

じつぎょう
が実行寺境内に建てられる。安政6年6月に日本は自由貿易開港、元治元年(1864)には、東山手高台の白亜の領事館やその敷地、および市中に滞在するロシア人たちは52名にのぼり、箱館は世界に「ロシアの町」の印象を与える。

松浦武四郎の調査が再評価され、薩摩・土佐はじめ諸藩は蝦夷地の開拓を夢見る。貿易開港により日常生活品は高騰し日高幌泉の昆布価格

が暴騰、箱館市中は食料品などの欠乏を招く。箱館では開港に伴う労働力ほか、米・醤油などの食料品、材木・蚕紙などの輸出品の調達は津軽・南部はじめ東北諸国に大きく依存していた。自由貿易開始後、俵物を求め英国商人と華僑が海峡を越えて箱館に渡り、それら外国人がもたらした食文化や西洋建築が箱館を窓口に北日本に広まる。

開拓の拠点都市・函館と西洋文明

明治2年(1869)5月、榎本らの降服を受けた明治天皇は「皇国の北門」の蝦夷地開拓の諮問を寄せられ、同年7月に開拓使が設置される。8月には蝦夷地は北海道と改称され11か国に分けられる。その中で開港都市函館は北海道開拓の海上交通の拠点都市として急速に発展する。

明治11・12年、函館は連年の大火を経験するが、北海道開拓使はそれを都市基盤整備の好機と捉え、市中からの寺社の移転、基坂・二十間坂はじめ現在も通用する西部地区の街区整備、建築物の不燃化を推進する。電信・水道敷設などインフラ整備も相次ぎ、そこには函館区長常野正義はじめ復興を期した市民・商人らの献身的な協力があった。

函館では外国人は市中、郊外などに分散して居住したため、市民と外国人とのダイレクトな接触が生まれた。また人口が少なく歴史も浅い反面、手つかずの水産・鉱山資源が眠る北海道の

可能性は、政府ばかりか外国人にも大きな期待を抱かせた。

居留地として函館にいち早く出現したキリスト教会の教育・医療布教は、地元だけでなく広く北日本に大きな刺激をもたらした。メソジスト系遺愛女学校の最初の入学生は城下町・弘前の子女で占められたという逸話もある。イギリス聖公会はアイヌの人々への伝道や医療に先鞭をつけ、カトリックは元町に4千坪の居留地を得て活発に活動した。

建築においても官庁や市民の住まいに徐々に洋風・擬洋風が採り入れられる。また明治10年代から昭和初期にかけて、イギリスなどの東洋艦隊の静養を目的とした入港が見られるが、このように函館には開港都市ならではの多様な刺激がもたらされ、衣・食・住にわたる西洋の風俗を市民に浸透させていく。



明治12年大火後の耐火建築

北洋漁業「函館」の繁栄の光と影

日露戦争後の国内航路の充実により、函館の輸出の中心であった昆布などの海産物は、次第に神戸など他港を経由することとなる。一方、高田屋嘉兵衛の択捉航路の開拓に始まる北洋漁業は、明治37年(1904)に始まった日露戦争の勝利による樺太南部領有と露領カムチャッカの鮭鱒缶詰生産により大きく発展する。

函館区の人口は明治39年に9万人超を数えるが、翌40年8月、罹災人口5万人という大火に見舞われる。同年啄木が札幌に去り、開港期から函館の発展を支えた初代渡辺熊四郎が病没する。人口が再び大火前に回復するのは大正元年(1912)であった。

大正2年、日魯漁業の前身・堤商会がカムチャッカ西海岸オゼルナヤ漁場に米国製缶詰ラインを導入し、東西カムチャッカの缶詰生産は飛躍的に増大。大半はイギリスに輸出され日本の有力な外貨獲得源となる。

幕末以来の函館の旧居留地は、大正5年、ハウル商会代表のウィルソンが没したことにより消滅する。また開港以来函館はロシアとの関係が密接であったが、大正6年ロシア革命により

ソヴィエトが誕生。その際に途絶えた国交が回復するのは大正14年である。同年4月にソ連領事館が設置され、ロシア正教会に漁業従事者のためのロシア語夜学が開かれる。ソ連は日本の漁業に規制をかけるが、それに対抗し北洋漁業の大合同が断行され新日魯漁業会社が誕生。現業の基地は小樽を退け函館に決定される。

大正3年に10万人台を超えた函館の人口は、昭和8年(1933)に21.7万人を数え全国9位の大都市となる。「函都一」は時には日本一を意味した。

日魯は世界最大の漁業会社となり高額配当を実施するが、経営権と優良漁業区を狙う「島徳事件」が発生。それを解決したのは元玄洋社社員真藤慎太郎であった。彼は日露戦争後漁業家に転じ、合併後の新日魯会社の役員に就任していた。事件解決後、堤清六は代表を辞任する。北洋漁業の基地函館は殷賑を極めるが、昭和9年3月、死者2200人・罹災人口12.4万人(函館市史年表)という世界火災史に残る大火により3万人が市外に流出。その後時代は世界大戦に突き進んでいく。



函館税関波止場から露領漁業へ向かう人々

開港都市はこだての形成

開港による海岸道路(バンド)の形成—近世箱館港から近代函館港へ

幕藩制下では、旅人は沖之口役所(後に海関所)で厳しく検査され、特権商人の波戸場である海岸には誰もが自由に近づけなかった。開港直後の安政6年(1859)8月3日アメリカ人牧師 V.D. コリンズは箱館の海岸について「私は護岸堤防の堅牢なことは感心した。切り出された石でできており、はしけで荷を受け卸するのに特に気を配って配置されている。大きな商家の大部分は海岸と平行している通りにあつて、後ろはこの堤防にまで張り出している。水辺に面しての道路はない。」*1と、箱館海岸図(本編4~5頁)や下図の海岸線に見られる風景を述べている。

近世後期以来、箱館での海産物交易は蝦夷地の生産者と本州方面からの買手(北前船船頭

など)の相対取引を許さず、必ず沖之口課税を代行する問屋の介在を経ねばならなかった。また、交易船に対する蔵入れ・陸揚げ等も問屋の指示によつた。こうして沖之口付近の海岸は、問屋など個々の特権商人層の支配下にあり、彼らは私有地の海岸に勝手に波止場を築いていた。

ところが、慶応元年(1865)4月箱館奉行小出大和守の上申*2によると、安政6年本格的な貿易開始にともない在留外国人たちまでが「借地海岸へ波戸場或ハ棧橋等補理(つくり足すこと)船積ノ便利ヲ謀」るので、これを中止させている。しかし、箱館市中商人たちも同様であるので、外国人に対し厳禁する言い訳もないと困惑する状況であつた。同年12月12日、箱館



奉行のお触れ^{※3}では、これまで「箱館市中海岸之儀、沽券地尻へ勝手に波戸場補理、諸品運送」して来た慣行のために、「殊に近來、外国貿易御差免相成候に付而は密商等有之、不取締相聞候」と、このような状況が密貿易の温床となっていることを指摘している。そこで、その対策として海岸の築立、道路の建設、波戸場の決定、改所の建設など「御取締筋、嚴重相立候様被仰出候」と述べ、この工事を慶応2年(1866)春より着工することになった。

幕府倒壊までに海岸道路の埋立は約半分の工事が進んだ。残余は新政府へ引き継がれることになり、その後、海岸道路に関連する大町海面の埋立は明治3年(1870)3月、地元商人たちの費用で竣工し、道路を除く土地は彼らに払い

下げられた。同様に内澗町の海面埋立も藤野喜兵衛他13名の商人の費用によって明治3年9月中に竣工しその後払い下げられ、明治4年(1871)頃には海岸道路は完成した。

海岸道路の完成に続き、明治5年4月、旅人検査の廃止、同年10月東浜町の栈橋建設が一体となって、海岸に沿って港を自由に往来できるバンドを持つ近代函館港の誕生となった。また写真にある洋館の運上所(のちの税関)も明治5年仲浜町に建築された。こうして開港を契機に函館の海岸線も近世から近代へと質的転換を遂げたのである。〔岸〕

※1『地域史研究はこだて』第4号、※2「箱館御用留(坤)」『新北海道史』第七巻、※3御触書(写) 函館市中央図書館



明治9年頃の函館港。地蔵町の波止場から東浜町・仲浜町海岸を望む。海岸道路に沿い中央右に税関や居留地の建物が見える

『箱館市中細絵図』〔文政頃(1818～29年)] 大町、弁天町付近。とくに「沽券地尻(こけんちじり)」とよばれる海岸線の波止場の凹凸に注目

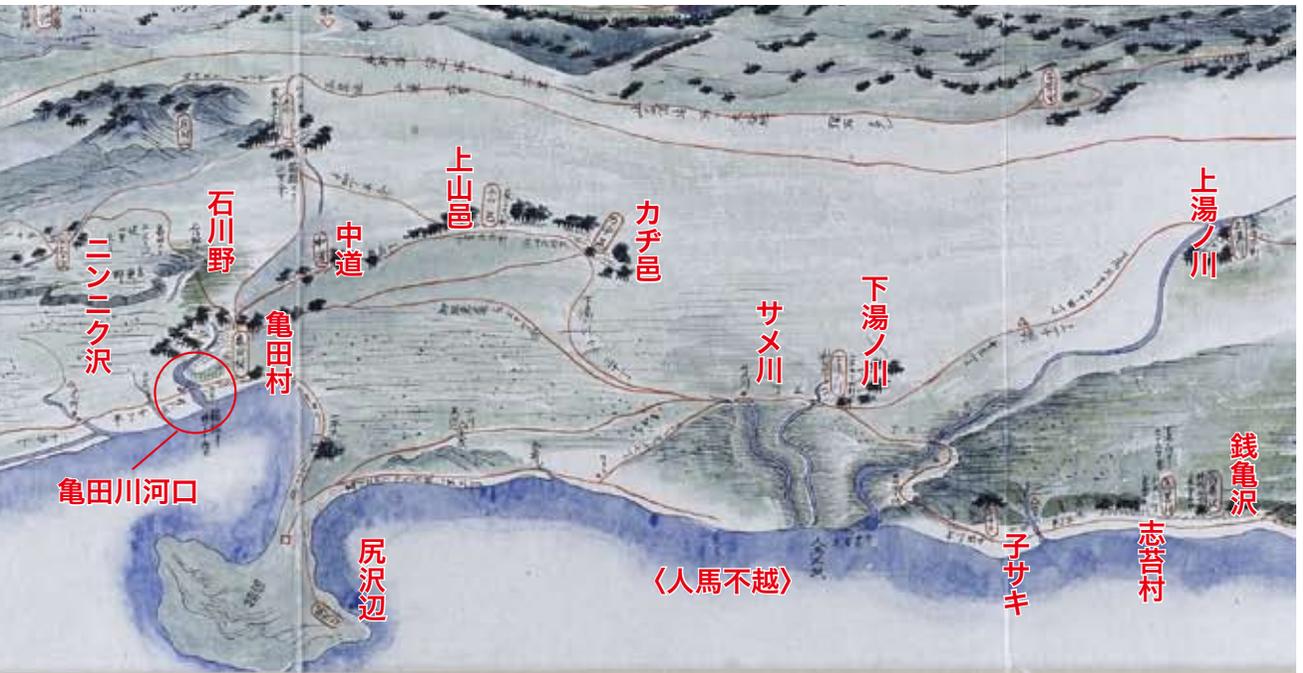
トされた建材が船で持ち込まれた。「飯盛り女」「洗濯女」の他松前稼には身売り目的も増大する。安政3年10月村垣範正は南部野辺地と津軽青森町で瀧屋ら4名の箱館付御用達と会談するが、それは彼らが「諸品払底」の箱館港に外国船への欠乏品などを送っていたからである。自由貿易開港後は、仲買商人が輸出品として利幅の見込める醤油や俵物、木材・蚕紙などを箱館に持ち込む。幕府の倒壊を迎え東北諸藩は小銃はじめ兵器を公然と、また密貿易の形でイギリス商人などを通し競って入手する。

漁村からの変容と和人地化

開港当時の箱館は山裾の市中と近在三十八の村々の他、下海岸の子安おやすからノタヲイすなご(野田生)にかけての魚介海藻を漁る「六ヶ場所」(村に準じ

る集落)から成っていた。うち箱館市中に最も近い尻沢辺(現住吉・谷地頭)は開港後に銭座などが置かれ生活品の製作が試みられる。内陸部への定住化が進み、米作も始まる。安政3年(1856)には「市之渡(一ノ渡)村」外9カ村からの初の米が箱館奉行から幕府に納められる。このころ各方面への交通の要所は、旧亀田川河口の現万代町から八幡宮門前辺りの亀田であった。

安政4年12月の人別帳によると、箱館と近在村々合わせ家数2066軒・人数1万1963人で前年と比べ80軒・416人の増加、六ヶ場所は家数971軒・6147人で7軒・133人の増加となっている。一方アイヌの人々は79軒・336人で、10軒・22人の減少となっており和人地化が一層進んでいる。〔清水〕



越え三里(12km)余で温泉に至る。下ると川汲で尾札部と並ぶ献上昆布(真昆布)の産地である。現在の湯の川温泉街のある河口地域は川幅が広く橋はなく<人馬不越>とある。下湯の川から海に下ると下海岸通りで子(ね)サキ・志苔村・銭亀沢・石崎と続き六ヶ場所の子安(おやす)に至る。カマヤの先は汐首岬で台場があり、坂上から25丁の馬道がある。絵図の成立は安政元年と思われるが、今も大半の地名が生きており、すでに村々の原型が出来て

開港期の西洋文明の諸相

「はこだて」の西洋建築の先駆者たち

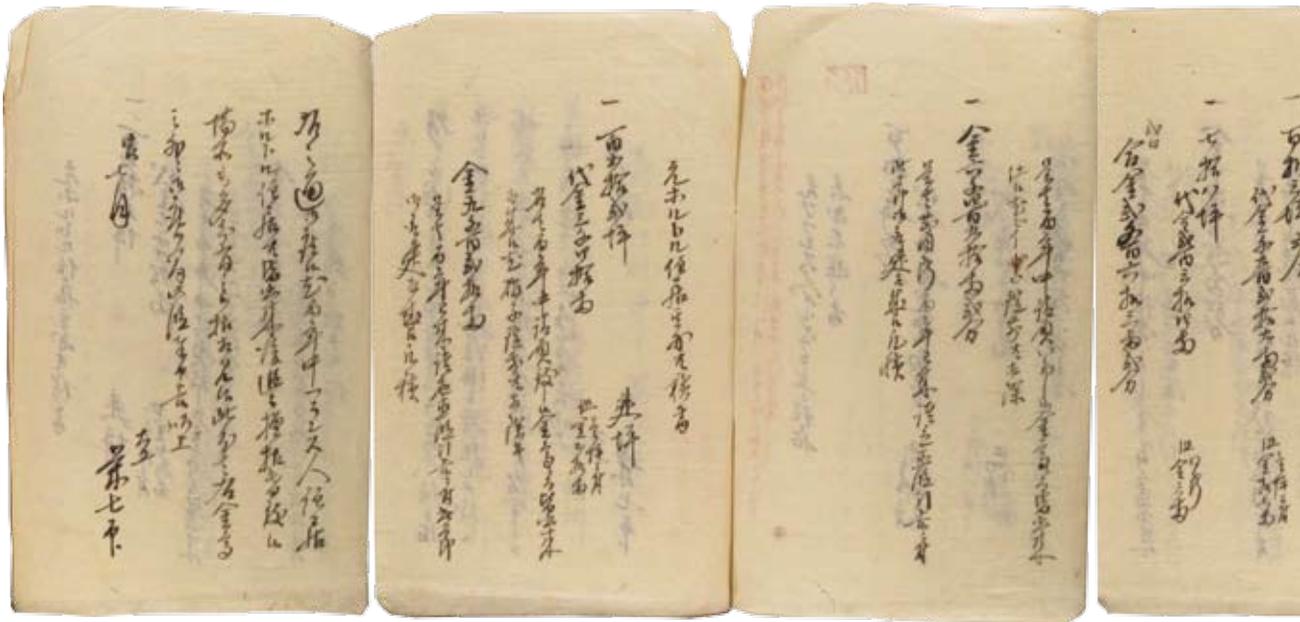
『函館市史』は、「外国人の家作をした人々」で、函館最初の洋風建築として安政5年(1858)に亀田で建てられガラスを使用したロシア病院を挙げている。翌年6月に現元町でロシア領事館の地ならしが始まり、請負人は(大石)忠次郎であった。忠次郎は後に、領事館隣のロシア病院やイギリス領事館、アメリカ領事館(未完)、大町居留地の造成を請負っている。ガラス・ペンキ・金具などの資材は香港から取り寄せたという。

文久元年(1861)6月、(池田)栄七が「山之上新地先」で、英デント商会支店支配人ポーター(現在の船見町7)の居宅・洋館を請負う。この地所は忠次郎が幕府から拝借したもので、幕府による大町居留地以外における箱館最初の相對借りの居留地であった。忠次郎の普請も同様だが、ポーターの洋館は欠陥が多く、栄七は契約違反として多額の償金を求められた。払

えず栄七は「身代限り(破産)」を申し渡され、家具や畳、引き戸までも処分される。

栄七は運上会所建設のため新潟から招かれた大工で、フランスの通訳であり隠れ宣教師でもあったM.カシヨンの鶴岡町の普請も請け負う。その見積書に「ビイドロ錠前」「硝子錠前」「附色値段」の文字があり、ガラス・ペンキの使用が判る。

忠次郎の先代は、山ノ上町(現在の弥生町一帯)を切開いた功労者で、奉行から毎年米十五俵を下された。芝居小屋を経営しており、工事を請けた忠次郎もそれを引き継いでいた。栄七同様、幕府・奉行の要請で慣れぬ工事を請け負い、西洋人から技法を学びながら函館の洋風建築・土木に貢献した。〔清水〕



『英館御普請御入用留』にあるカシヨンら住居の見積書。ビイドロ、硝子などの記載があり、文末には「大工栄七」の名前が見える

ロシア流「写真術」を学んだ3人の箱館写真師たち

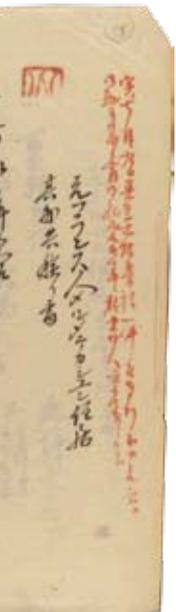
五稜郭跡に箱館奉行所が復元された際、パリの骨董屋で発見された「箱館奉行所庁舎古写真」が大きな役割を果たした。最近この写真が函館の誇る写真師・田本研造により慶応4年（明治元＝1868年）頃撮影されたものと確認され、話題となった。

実は函館は日本における写真発祥地の1つで、特に幕末・明治に活躍した木津幸吉、横山松三郎、および田本の功績は大きい。彼らはロシア領事ゴシケヴィチや医師ザレスキー（ゼレンスキー）からロシア流「写真術」を伝授されたが、これは他の開港場でのアメリカ流やオランダ流の伝来とは異なる。

北海道初の写真師である木津は、ゴシケヴィチの指導を受け、元治元年（1864）あるいは慶応2年、新地新町（現在の弥生町、姿見坂を登り切った辺り）で開業した。拵捉生まれ箱館育ちの洋画家・横山は、西洋画法の向

上に必須と考えた写真術をゴシケヴィチらに学び、明治元年東京両国で写真館を開いて「写真油彩」を確立した。田本は、横山の勧めでザレスキーや木津から写真術を学び、明治2年上京する木津より写真機材一式を譲り受けたことを機に大工町（現在の末広町、八幡坂通りの中程）で北海道で最初の写真館を構えた。彼は函館を拠点として多くの写真師を輩出しつつ、開拓使の依頼により撮影したドキュメンタリー性の高い記録写真を数多く残している。これらは肖像中心だった日本写真の草創期において異彩を放っており、「北海道写真」として評価が高い。

以上の3人は、自らの努力と情報交換を絶やさず、学んだ以上の高度な技術を確立した。元町地区にはこのような彼らの高い志が中華会館近くに現存する北海道最古の写真館・旧小林写真館と共に息づいている。〔三上〕



慶応4（1868）年頃の箱館奉行所（田本研造）

西洋料理店の始まりと洋食文化の摂取

主に来箱外国人を対象とした西洋料理店としては、安政6年（1859）11月13日、大町1丁目町人 井重三郎は箱館奉行に「外国人向料理茶屋渡仕度旨」の出願をしている。これは当時まで西洋料理店がなく露国は本国より呼び寄せようとしているので、この際運上所の近くで開業したいというものだったが、奉行所の許可は形式的なもので以前から営業をしていたようだ。その様子については20年後の明治2年の『箱館大町家並絵図』が残る程度で、残念ながらどんな料理を出したか文献が見られない。

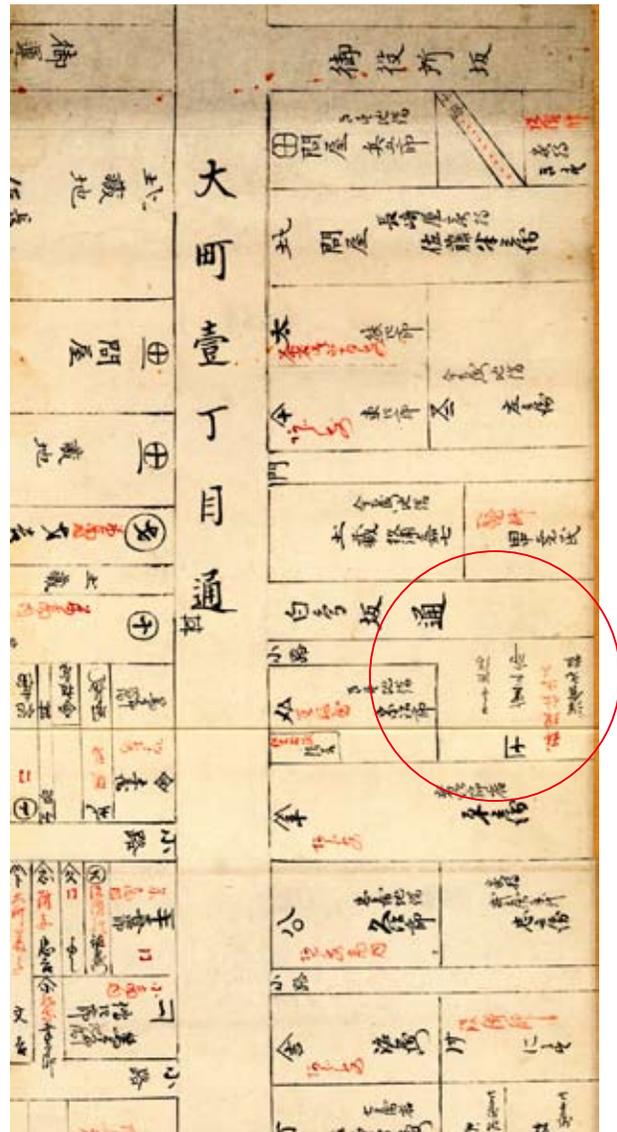
なお長崎においては、函館と同じく安政6年6月、中村とめが純オランダ料理を食べさせる西洋料理店「福屋」を開いている。

安政4年（1857）、北辺警備の武士たちの脚気予防のためコーヒーが箱館経由で宗谷に供され、万延元年（1860）年、箱館での飲用のための輸入が始まる。

元治元年（1864）には、フランス人メナール（Menard）が軍艦納入用に製パン業を開始、ロシアホテルでもパンの製造販売が始まった。また、その元従業員であった柴田幸八も市中でパン屋を開業、製パン業で最大の成功者となった中村作兵衛の東洋堂は、イギリス艦隊に多い時で16万斤を納入している。同じく外国船向けとして七重農業場ではバター等が作られている。

ビールにおいても、製造こそ明治9年（1876）

開設の開拓使札幌麦酒醸造所に先を越されるが、函館でもすでに明治6年から輸入が始まり、明治15年4月今井市右衛門と泉藤兵衛が「ストマックビール」を、同年5月石黒源吾が「公ビール」を（いずれも末広町）、明治31年には渡辺熊四郎の支援を受けた金沢正次が「函館麦酒」の製造を始めた。〔佐藤〕



明治2年（1869）『箱館大町家並絵図』

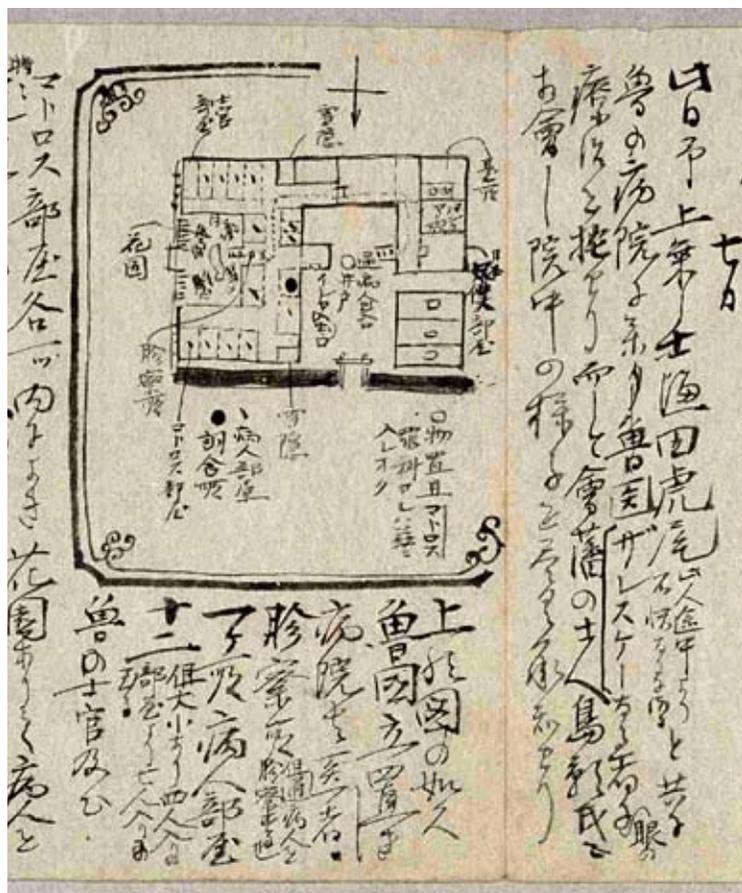
■ 新島襄も通院、ロシア病院が契機となった北海道の西洋医学

箱館から脱国し後に同志社を創設した新島襄はロシア領事館付設の復活聖堂のニコライ神父の下に身を寄せていた。領事館の隣にはロシア病院があり、新島は眼の治療を受ける為に通院していた。新島の『函樞紀行』の中にその様子が述べられている。

「魯国立て置きし病院は～中略～入れば高き臥床、飯卓、蒲団（此の上蓋は一ヶ日毎に一新するなり）、筒ぼう繻半、股引等を与え呉れ、而して三度の食事は其者の病気に順い食物差異あれど、一樣の食物は煮たる牛肉～」これに対し箱館奉行所については「日本政府立置きし病院は、魯の病院とは相反し、食物宜しからず、病人第一要する所の薬宜しからず、肝心なる医者は竹林より来るゆへ、院中甚だ寥々の由～。それに相違し、魯の病院には病人、院に満充し、通病人は凡五、六拾程なり」とロシア病院の人気の高かったことを物語っている。ロシア病院は、最初は亀田万年橋あたりにロシア海軍の士官水兵の為に建てられたが手狭で、火事で焼失しロシア領事館の隣に文久3年（1863）に完成した。これに対して安政6年（1859）に、箱館市中の医師が病院の建設を計画していたが、本格的なロシア病院建設の噂を聞いて驚き、外国人に先

を越されては困ると、かの栗本鋤雲や塩田順庵らが中心となり、紆余曲折を経て山之上新（現弥生町8番）に箱館医学所を建設、これが現在の市立函館病院へと継承発展する。ロシア病院は慶応2年（1866）に火事で焼失し二度と再建されることはなかったが、その短い期間の中で函館在住の医師達が先端西洋医学を学び、深瀬洋春など私立病院を開院するなど北海道の医療に大きな影響を与えた。

病院だけでなく医学所の方も存続して今日に至っていれば、函館の智の集積も一層充実したものになったのではないかと惜まれる。〔犬島〕



新島襄によるロシア病院スケッチ。
『函樞紀行』（同志社社史資料センター蔵）より

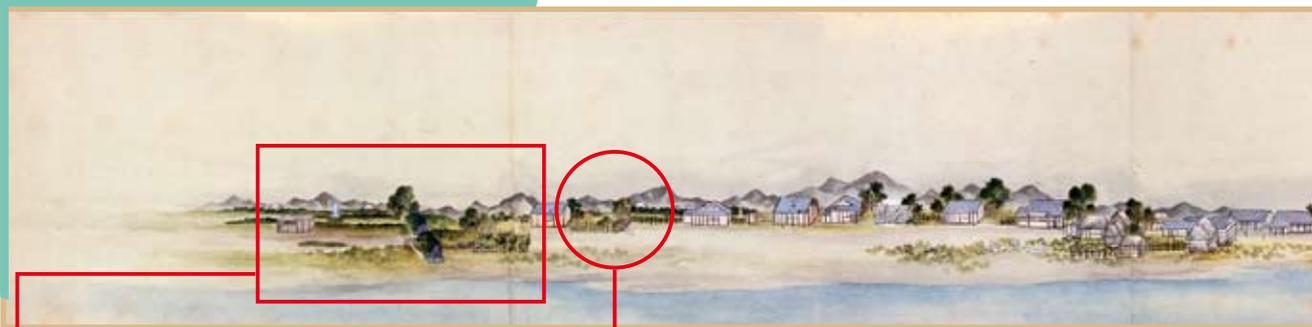
港町「はこだて」の移り変わり……………

開港前

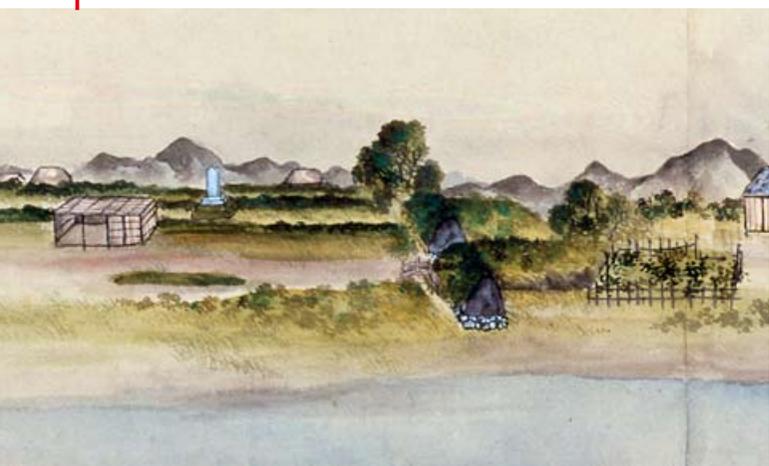
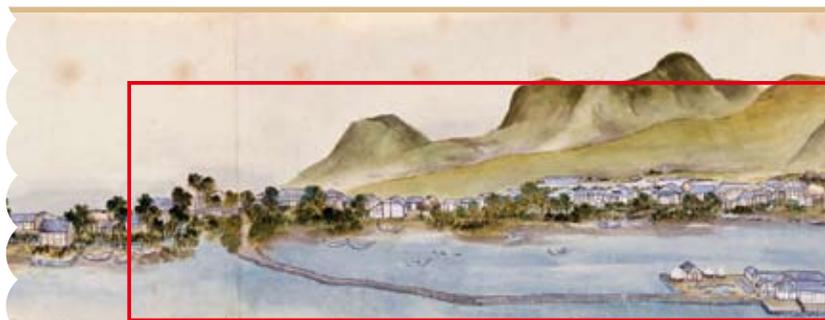
(前幕領期)

箱館海岸図 (国立公文書館蔵)

箱館出入口の枅形から弁天社まで、現在の市電通りの「魚市場通」と「函館どつく前」電停間の沿岸の家並みが描かれる。視点は沖之口役所東側の間屋



龍神社 漁業繁栄・航海安全を祈願し建立。当時は海岸にあり安政6年3月大火で類焼。現在の栄町に移転し海神社と称す。枅形から作事場の堤防手前までの海岸は開港後民間により徐々に埋築される。



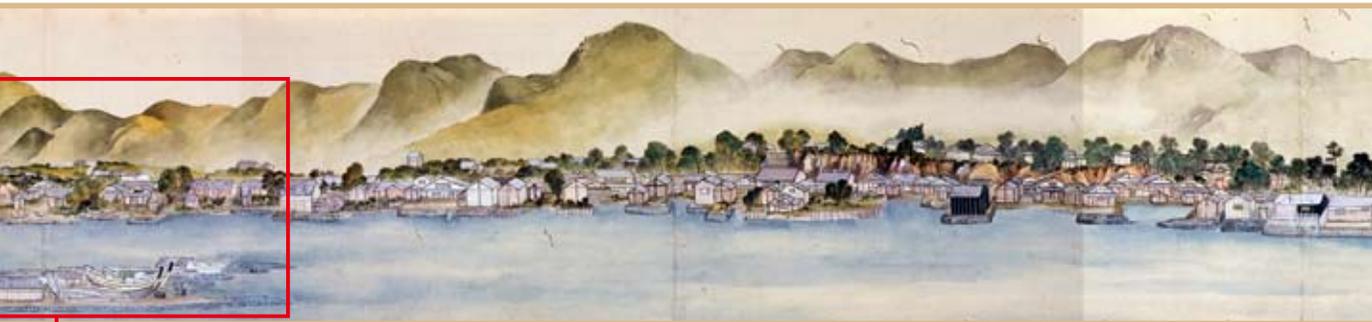
枅形 箱館市中への出入口の検問所。「魚市場通」電停の線路上にあった。枅形の左には茶店と1本の白石の標柱があるが、安政2年(1855)地図には、箱館市中警護を任されていた「南部美濃守持場」「津軽越中守持場」の2本の標柱が描かれている。



△亀屋の沖。蔵々が港町箱館の繁栄振りを伺わせる。絵図中央山手の白い土蔵の右の一郭がお役所、赤い鳥居が八幡社。沖からは連なる「こぶ山」の薬師山が最も高いと考えられていた。

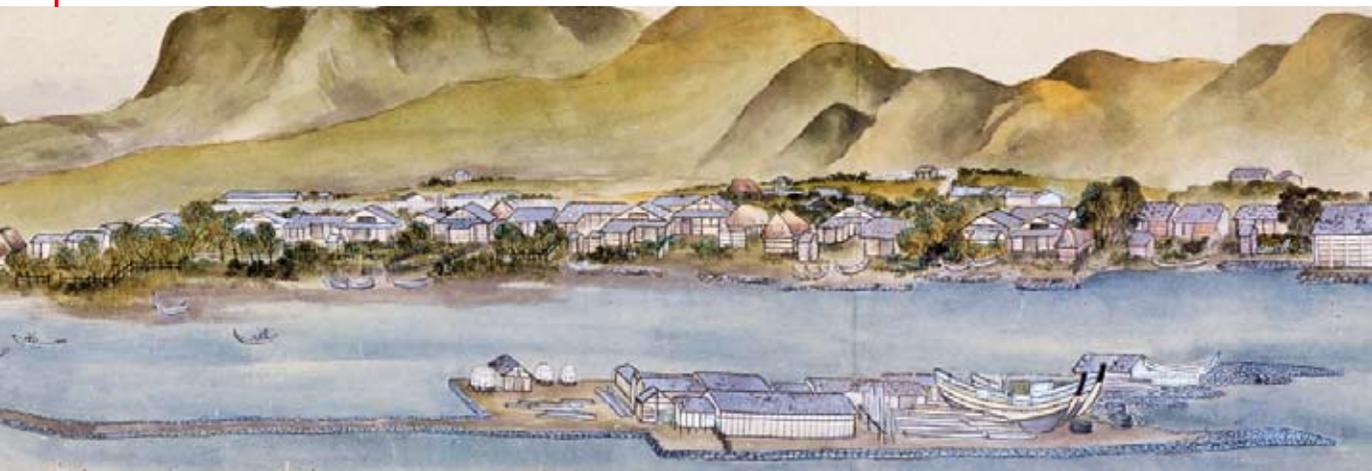


→
下の図の
左へ続く



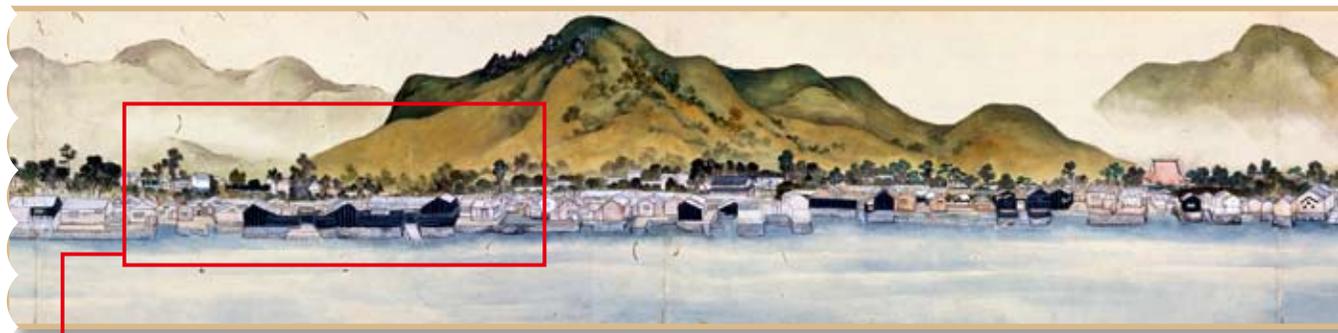
→
次頁へ続く

築島の作事場 幕府の築島の造船所地を高田屋が拡張。築島へ通じる堤の陸側左に栄国橋が見え、その奥に高田屋の屋敷がある。堤から西側入江一带は浅瀬で、海藻や魚介が獲れた。

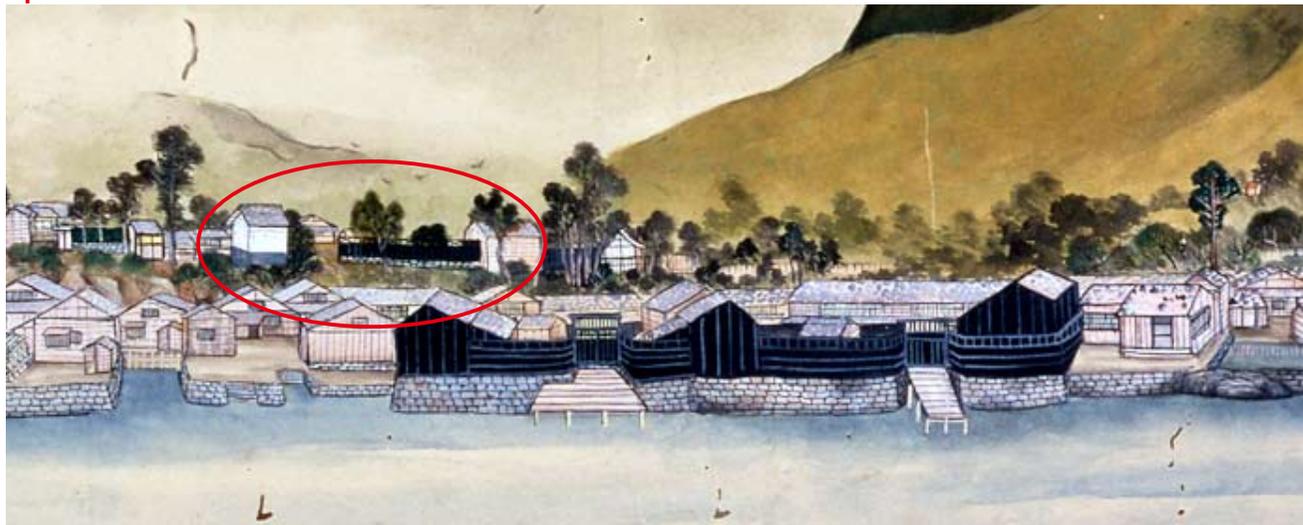


箱館海岸図 成立年代の特定

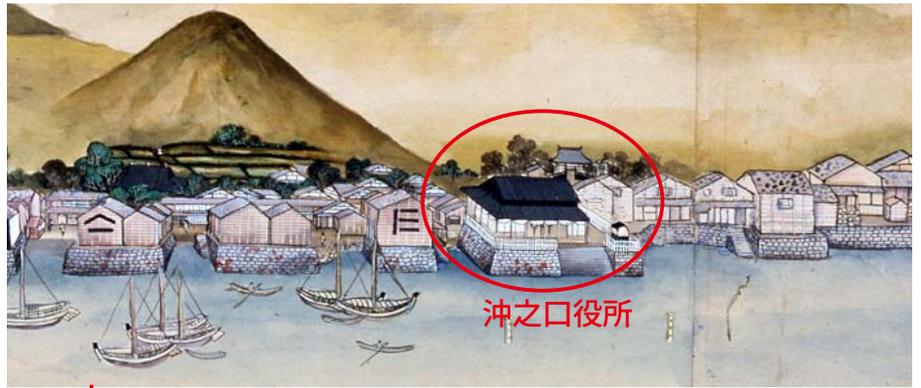
文化年間（1804～1815）に長崎屋俵物蔵東隣から移転した沖之口役所が、本図ではその移転先である大町に描かれており、松浦武四郎の『蝦夷日誌』には「海に突き出し、柵をめぐらせ、常夜灯を備えた沖之口役所が文化8年（1811）5月に再建された」との記述がある。一方『蝦夷実地検考録』によれば、文化9年に弁天社が本図の位置より西方向に移動している。本図の成立年代はこれまで不詳とされていたが、以上により文化8年5月から文化9年の間に描かれたと推定される。〔清水〕



長崎屋の俵物蔵 山手の楕円一角がお役所。海岸の蔵と黒板塀で囲まれる黒い建物は長崎屋佐藤半兵衛の俵物蔵で、選別場の庇や干し場の中庭をもつ。昆布や干あわび・煎海鼠等の俵物は長崎会所からの積取船が集荷に来ていた。文政期には東側の作事場が海岸線に出てくる。



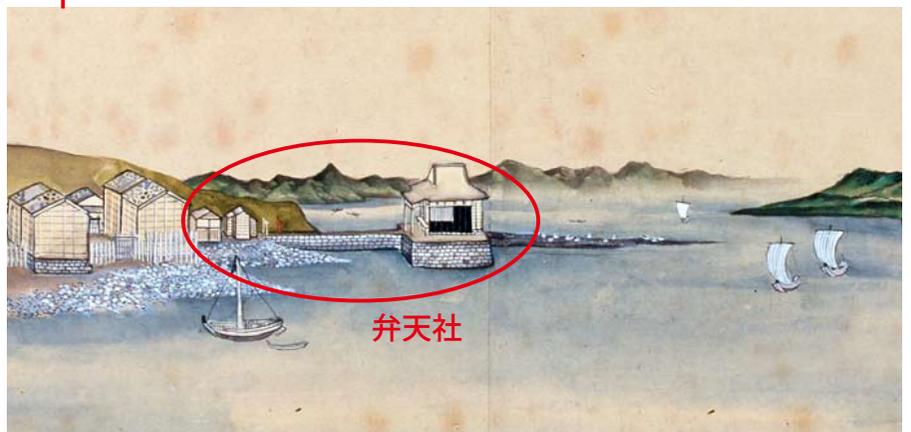
沖之口役所 蝦夷地出入りの船の改め（検査・徴税）所。蝦夷地請負漁場の生産品売買価から税を徴収、場所請負人の運上金の収入とともに箱館奉行の二大収入であった。



→
下の図の
左へ続く



弁天社 北西角にあり白と赤の鳥居の浮弁天社。享和元年（1801）に海中に築出し、社を移す。文化9年（1812）お蔵地のため移動、開港後は弁天台場築造で現在地に移転。現巖島神社。



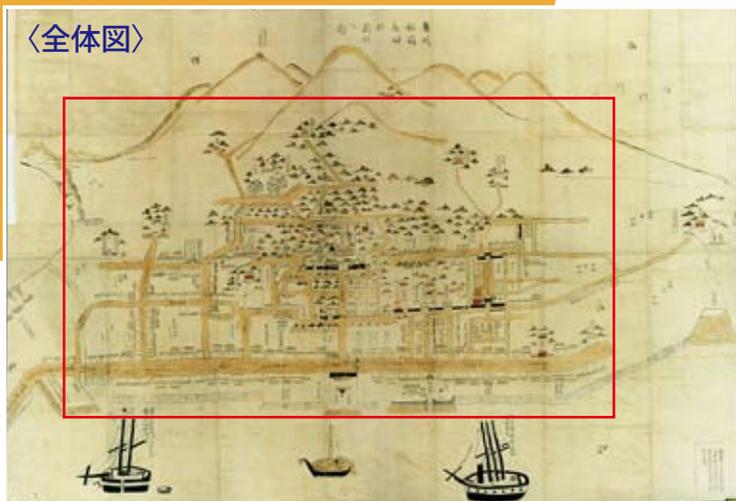
開港

(安政5年～文久はじめごろ)

自由貿易開港直後の箱館

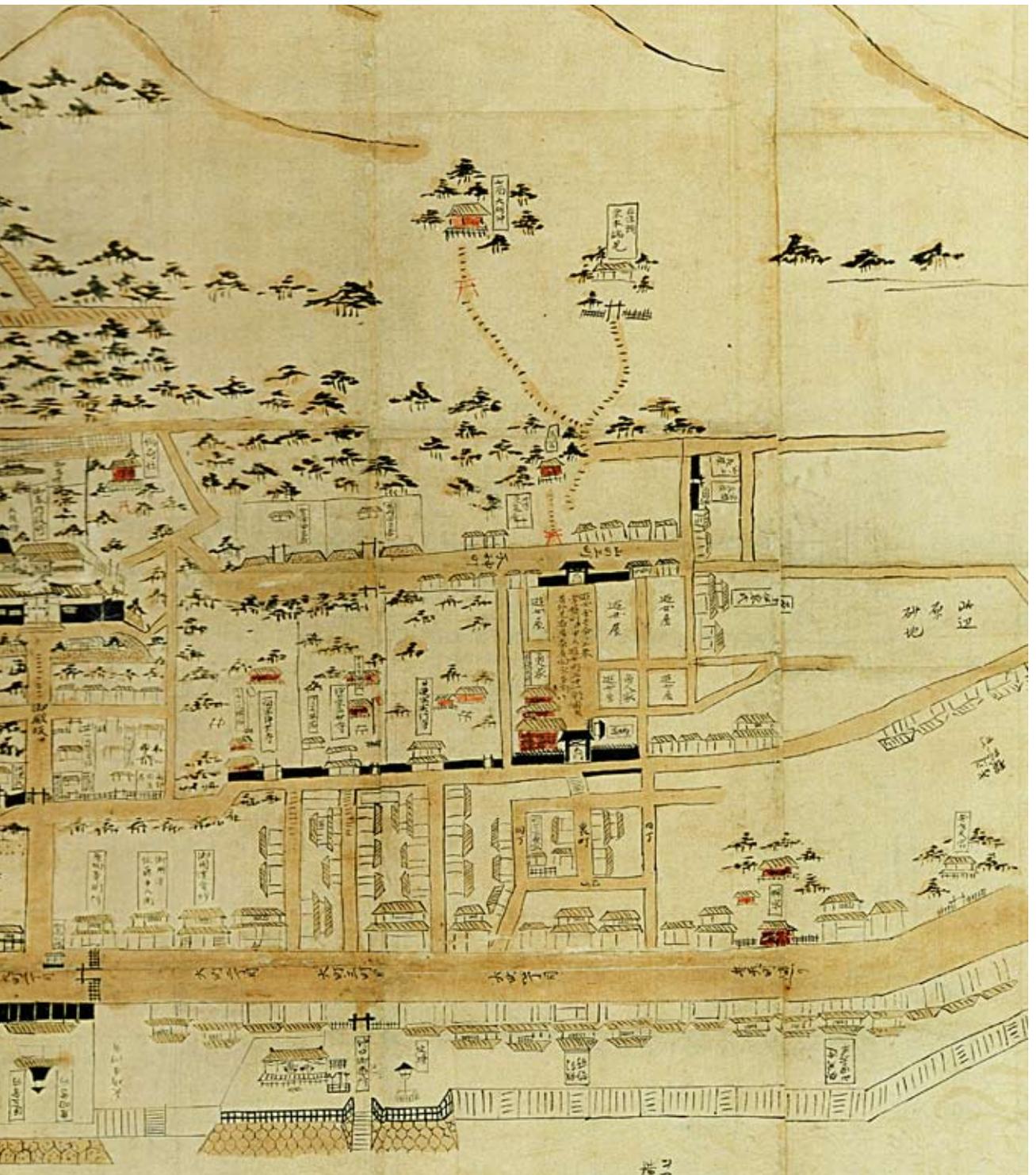
港に停泊している2隻(全体図)は箱館丸とロシアの軍艦。文久元年(1861)8月、ロシアの軍艦が対馬を占領するというポサドニック号事件が発生、ロシアはイギリスの抗議により占領を中止するが、この時期、箱館にはロシア少将リハチョフの艦隊

〈全体図〉



が4回入港している。絵図の作成は、この事件の発生した文久元年と思われる。お役所の東山手にロシア領事館と医師宅がある。「御奉行役所」（お役所）坂下の運上会所・産物会所を中心とし西に「長崎屋河岸」の俵物蔵がある。山側角に「御高札場」と「産物売捌所」「御用達佐藤半兵衛」「御用達会所」が

並ぶ。東側は「浜田屋河岸」「御用達杉浦嘉七」と有力商人が見え開港直後の箱館の商業地区を示す。西山手の天神社から野道は七面大明神と「賄頭栗本瑞見（鋤雲）」役宅へ分かれる。この地図では、浄玄寺にイギリス人、称名寺にフランス人（カシオン）とアメリカ人居宅がある。



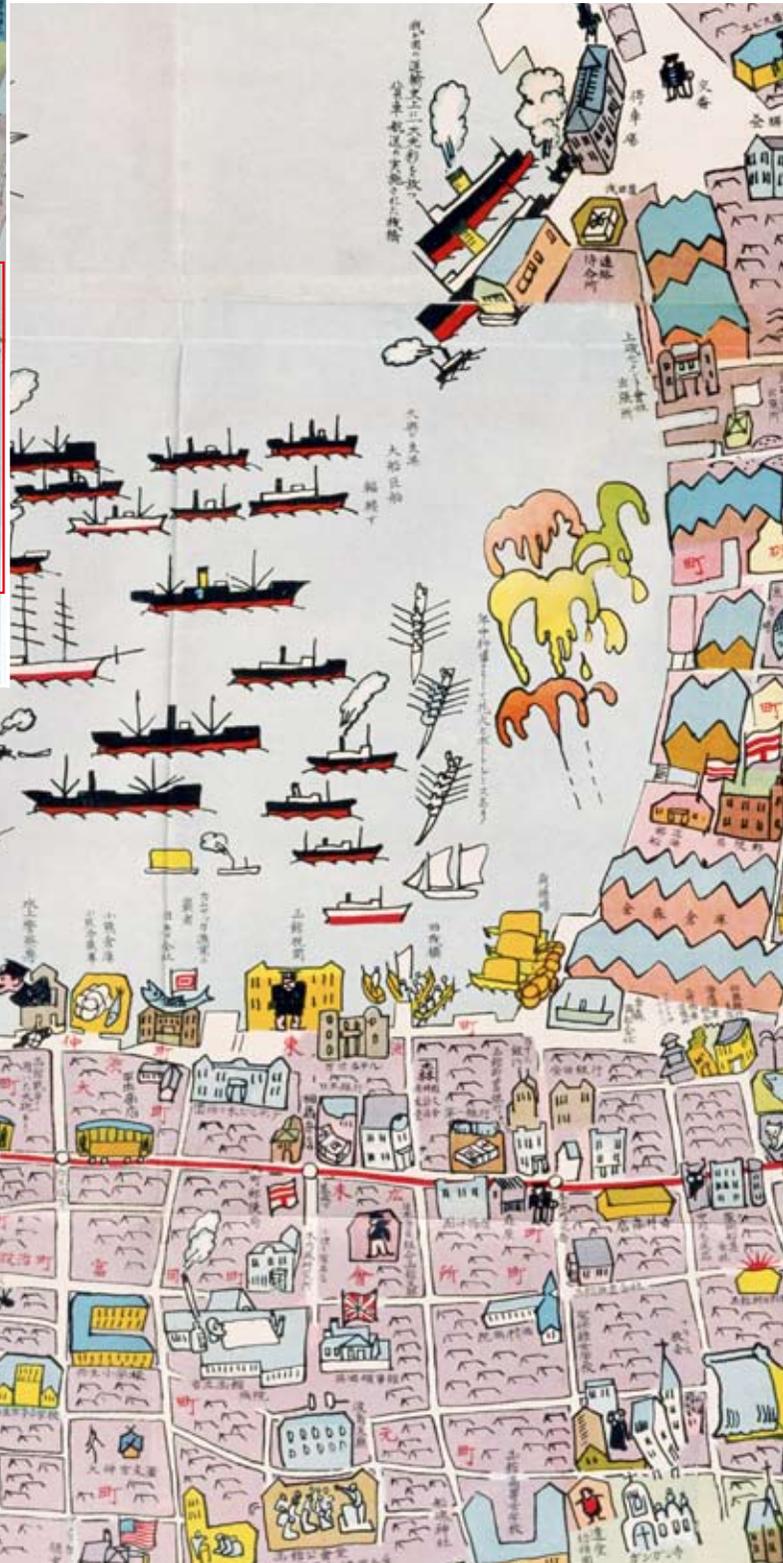
全盛期

(大正10年大火後～昭和初期)

函館案内漫画鳥瞰図

(大正14年 森大正堂発行)

大正10年(1921)4月、函館は二千戸焼失の大火に見舞われるが、同年末14.7万人であった函館の人口は5年後の大正15年には16.8万人へと膨張する。ソ

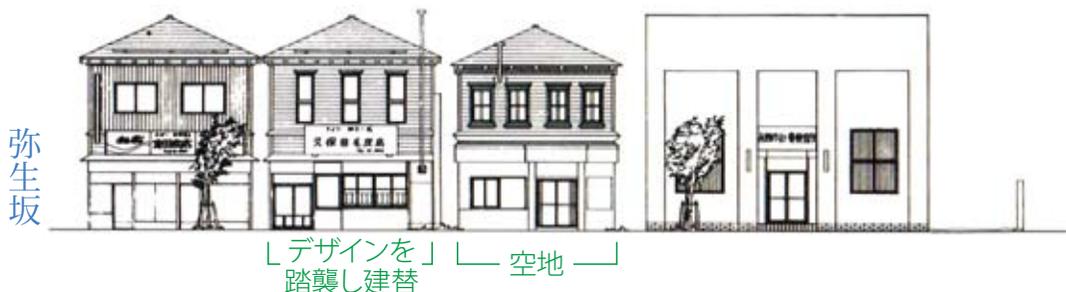


ヴィエト政権成立後、北洋漁業への圧迫が強まったため、事業者は大同合併し大正10年に新「日魯漁業株式会社」が発足する。大正14年1月北京における「日ソ基本条約」の調印により国交が回復し、旧ロシア政府との間で結んだ日露漁業協約に基づく

露領漁業権の有効性が確認される。以降、昭和初期にかけて北洋漁業は全盛期を迎え、基地の街・函館は東京以北最大の繁華を誇る近代都市となる。鳥瞰図はその時代の街の様子を生き生きと描く。



見なおされる歴史的街並



弁天・大町の商家の街並

二つの歴史的街並が熱い視線を浴びている。弁天・大町地区の商家建築と銀座通り(旧恵比寿町)のカフェ街である。

前者は江戸時代中期から発展した箱館の発祥の地で、開港後は北洋漁業の隆盛とともに近代都市「大函館」の経済を担った。しかし市街地の東部への拡張と北洋漁業の衰退によりその地位は急激に低下していく。

上の立面図は、市電通りの弥生坂から常盤坂までの函館山側の街並で、函館市が行った元町、末広町、大町、弥生町、豊川町、船見町における伝統的建築物群調査の報告書『函館市西部地区の町並』(昭和59年3月発行。街並・主要建築物調査は58年7月に実施)から転載した。既にいくつかの建物は失われているが、明治から昭和初期の商店・商家の街並を残している。

弁天・大町の商家建築は、表通りから店舗・居宅・

蔵が連続するという江戸期からの商家の様式を伝える。構造は木造、石造レンガ造と多様であり、外装は下見板張、漆喰塗のほか応接室の外壁をタイル張りとしたものも見られる。新旧あるいは和洋の資材・様式が混在する家並は、北の開港都市として発展した函館の歴史を映している。また先頃、大町の市電通り港側に、初代函館区長を務めた茶商常野正義^{まさよし}の経営した常野商店支店の遺構(明治9年築か?)が確認された。

近年市電通りから一本港側の海岸通り(旧西浜町・仲浜町)では古建築の再活用が活発化している。写真の米穀商・太刀川商店(重要文化財)の白壁の店舗はカフェに、奥の木造3階建ての旧堤商会(日魯漁業会社の創業社)はレストラン・雑貨・デザイン事務所の複合施設として甦り、ボートハーバーとなった付近の海岸と共に新しい函館の港景観を造っている。〔清水〕



歴史的な建物の再利用が進む旧西浜通り。先には広いボート・ハーバーのある新たな景観がみられる(現在弁天町の海岸通り)



初代函館区長・常野正義の経営した常野商店支店の遺構

昭和58年7月調査時点での
大町市電通り山側の街並
(緑字は現況)

常磐坂

——— 新たな住宅に建替 ———

道南・津軽に広がる洋風建築

市街から海岸町・万代町を経て北部方面に続く国道5号線の道沿いに明治から昭和初期の古建築が散見される。切妻の大屋根を持つ米穀店、旅籠、路地には和洋折衷住宅があり土蔵風の倉も残る。

昭和9年3月、函館は住吉町を火元とする未曾有の大火に見舞われ、その際焼失を免れたのはこの国道5号線沿いと、およそ二十間坂以西の「西部地区」くらいであったが、青柳町公民館裏の旧杉浦嘉七邸は奇跡的に類焼を免れている。江戸時代を思わせる重厚な土蔵や、欧米直輸入のデザインを思わせる洋館の応接間、そして木造洋館の導入期を思わせる居室など貴重な建築遺産である。

開港都市函館の洋風建築文化は南北海道の



国道5号線沿いに残る昭和9年大火前の建築

農漁村に広がり津軽海峡を渡る。函館で洋風建築の技術を習得した堀江佐吉は、弟横山常吉とともに、弘前に銀行・教会など多くの洋風建築を残す。佐吉の子も秋田小坂鉱山事務所の洋館で有名である。〔清水〕



堀江佐吉の設計による旧弘前市立図書館（左）と小坂鉱山事務所

〈随想〉ハイカラな函館・銀座通りを思う…

昭和初期、銀座通りの函館日々新聞社屋を私の祖父が購入し、遠藤呉服店を営んでおりました。当時、銀座通りで活躍していたのが、作詞家高橋掬太郎でした。高橋はコロムビアレコードに移るまでの12年間、この函館日々新聞社に社会部記者として在籍します。彼を有名にした大ヒット曲「酒は涙か溜息か…」は、カフェが軒をねていた当時の、賑やかだった銀座通りを歌ったものであります。

銀座通りの誕生は、大正10年(1921)の大火の直後、政財界人を中心に結成された函館火防実行委員会の計画が発端でした。計画は現在の末広町・豊川町・宝来町にかけて約500メートルに渡る道路を設置、その両側に当時の最先端の耐火建築であった鉄筋コンクリートブロック造の建造物を建設し、火災時に防火帯の役割を担わせるというものでした。

その後銀座通りは、北洋漁業の好景気もあり、たくさんのカフェや映画館などを中心に東京以北最大の繁華街として知られるようになります。完成された街並みを眺めて、誰からともなく「これは函館の銀座街だ…」という声が上がったといいます。東京の銀座が大正12年の関東大震災により近代化的な街並みに変容したのと呼応するものがありました。

現在の銀座通りには、当時のハイカラな雰囲気

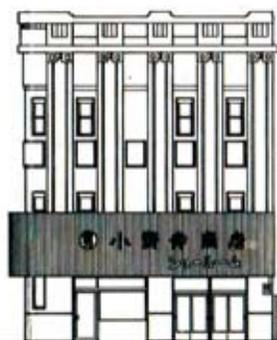


ハイカラな雰囲気を感じる一角。中央がラッキーピエロ

気を感じられる一角もまだ残っています。理髪店だったレトロなビルは人気ハンバーガー店「ラッキーピエロ十字街銀座店」として再利用されるほか、大正ロマン風に新築された建物は蕎麦店「天満つ」として営業しています。老舗の宝来パン本店も頑張って懐かしい味を残し、高砂通り交差点の斜め向こうには、当時の銭湯・衛生湯が美容院「AMIN」として再活用されるなど、まだまだ大正から昭和にかけての「カフェ街」の香りが漂ってはおります。

しかし気が付いたら更地になっている風景も年々と増え、なんとか銀座通りの魅力がいつまでも残ってもらいたいと願うばかりであります。

〔遠藤〕



←高田屋通り

昭和58年7月調査時点での
宝来町～末広町銀座通り函館山側の街並
(緑字は現況)



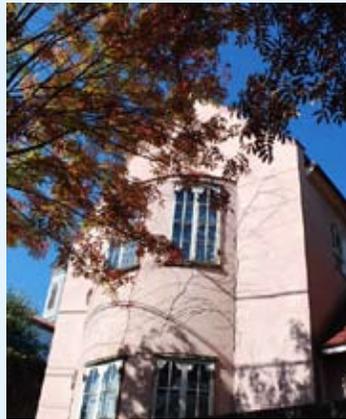
— 新たな飲食店に建替 —



新築された天満つ

高砂通り

函館の往時の気風を象徴する、関根要太郎の作品群



建築家・関根要太郎(1889-1959)は、大正7年(1918)から昭和11年(1936)にかけて、函館で10余りの設計作品を手がけている。うち末広町の函館海産商同業組合事務所(右の写真、大正9年築)、元町大三坂の旧亀井喜一郎邸(中央の写真、大正10年築。喜一郎は亀井勝一郎の父)、末広町八幡坂下の旧百十三銀行本店(左の写真、大正15年築・現SEC社屋)の3棟が現存する。関根作品は、旧函館区公会堂や元町の教会群に比べ知名度は低いかもしれないが、大正末から昭和初期にかけての海産景気や、十数年間隔で大火が起きたという函館の歴史を辿っていくと、非常に意義深いものと思われる。

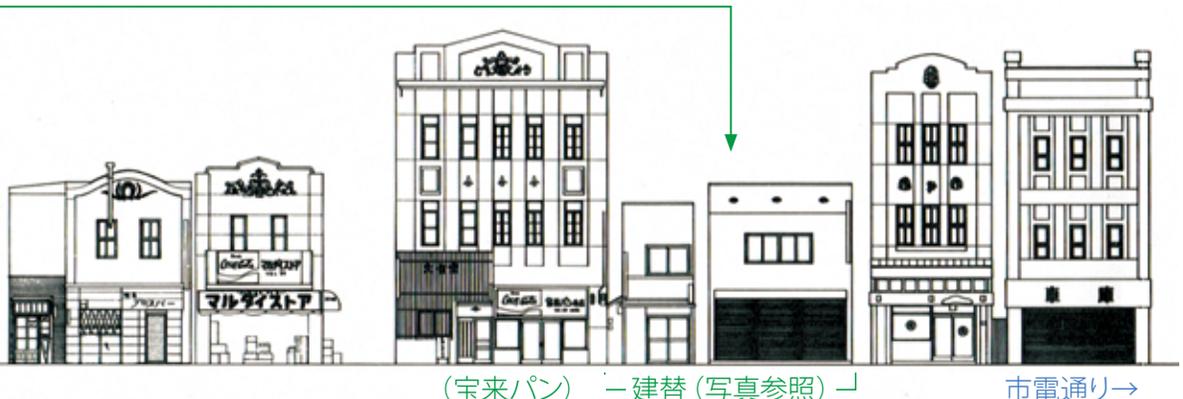
東京に活動の拠点を置いていた関根が、不動貯金銀行の函館支店建設を機に、地元の有

力者と親密な関係となり、自らの得意としていたモダンな作風で、次々と函館の町を彩ったという事はとても興味深い。

函館では同時期に木田保造(1885～1940)、中村鎮^{まもる}(1890～1933)という在京の建築家がやはり自らの得意な分野を生かし活躍している。当時の函館は、その人物の実績や年齢を問わず、実力がある者の意見を素直に聞き入れ、委ねる所は全てを一任するという、かなり革新的な気風があったのではないかと想像する。

当時の函館の建築史を丹念に調べていくと、人と人との美しい信頼関係を発見する事が出来る。それを象徴するのが、函館に現存するモダンで美しい関根の設計作品ではないかと筆者は考えるのである。

〔町田仁一函館の古建築を生かす会〕



「エトランゼのマチ ハコダテ」の西洋文化

■「北方婦人」にかかわった、函館の“ハイカラ”女性たち

函館初の婦人新聞『北方婦人』8頁タブロイド版は、1929年（昭和4）創刊され、1931年24号で廃刊した。女が物を言い書く事が珍しかった時代に若い独身女性が夜間休日返上で取材し記事から広告まで取った。

中心となった森永製菓事務員土井多紀子は、与謝野晶子に心酔していた歌人でもあり、阿部正雄（後の直木賞作家久生十蘭）が記者をしていた『函館新聞』歌壇に投稿、「北方婦人短歌会」選者も務めた。

5号で「記事があまりブルジョア気分偏して居りはしないか」の投書を受け、紙上に市川房枝の提言「女を加えた政治をほしい」が載る。

函館郵便局員丸山優子24歳（当時）は「総

選挙に際して函館の婦人に望む」を書いた。晩年、「夜の花街を歩きながら友達の酒場へ通い、川崎女史の後にくっついてよく遊び歩きました…文芸協会に入会…討論など賑やかでしたが共産党員川端よね女史の友達もあり、私は黨員でもないのに…特高に呼ばれ…暗い世相…」と回想した。

川端よねは1927年20歳で函館公園のメーデーに壇上から挨拶した断髪の似合う女性である。川崎女史とは川崎ヤエ（当時26歳の小学校教員。のち『函館日日新聞』記者。戦後、初の女性函館市議）で、社屋が銀座通りに移転後に編集長として藤岡道子他数々のペンネームで健筆を揮った。

終刊までの定期購読者に阿部鑑（久生十蘭の母）がいた。庁立高女茶華道教授で『北方婦人』に写真入り生花記事や「支那服を着たる女の戸によりて暮れ行く街を眺めて居りぬ」等の短歌も寄稿。廃刊年秋51歳の鑑は23年間勤めた高女を退職し、留学中の息子が住むパリまで1人船旅をした。

『青鞥』の平塚らいてうに憧れ上京、帰函後は曙町（現元町）「春陽女塾」でフランス刺繍を教えた歌人岡田はるも創刊号からの読者であった。
〔酒井〕



丸井デパートのエレベーターガール。女性の職業にもハイカラが登場。昭和5年11月8日付『函日』

■ 函館の風土から生まれたコスモポリタン 長谷川兄弟

開港地としてエキゾチシズムやロマンチシズム溢れる函館の風土が生んだ才能に長谷川兄弟がいる。

元町で育った長谷川兄弟はいずれも弥生小学校から函館中学（現函館中部高校）へと進学するが、長男海太郎は函館中学をストライキ問題で退学後渡米。アメリカ各地を働きながら4年間放浪、帰国後その体験を生かし谷譲次、林不忘、牧逸馬の3つのペンネームで『めりけんじやっぷ』『丹下左膳』シリーズ他膨大な作品を生む。超売れっ子作家となり大邸宅で豪勢に暮らすが過労のため35歳で急死した。

中学卒業後上京し川端画学校に学んだ次男滂二郎は昭和6年（1931）パリに遊学、帰国後は画業に専念する。評論家洲之内徹に作品『猫』を高く評価された他、親友水谷準の薦めもあって、地味井平造のペンネームで『新青年』に探偵小説、モダニズム小説を発表した。

大阪外語学校露語科を卒業した三男濬は父淑夫の知人・大川周明の紹介で満州に渡る。満州国外交部を経て、甘粕正彦が理事長を務める満州映画協会に入社、ロシア語通訳者として活躍し、雑誌『満州浪漫』を発刊。甘粕正彦の服毒死の最期も看取った。後年はバイコフの『偉大なる王』を翻訳したほか、神彰がドン・コサ

ック合唱団を日本に招聘した際には、同郷の知人として協力している。

法政大学文学部ドイツ文学科を出た四男四郎は南満州鉄道会社に勤務するが、5年に及ぶシベリア抑留を経験。その後『シベリア物語』『鶴』で作家として地歩を築き、2度芥川賞候補となる。詩、戯曲、童話、翻訳、評論等活動は多岐に渡り、新日本文学会、記録芸術の会、アジア・アフリカ作家会議等の芸術運動にも携わる。

長谷川兄弟の活動はコスモポリタンとしてスケールが大きく、それぞれが多様な才能を発揮した。〔千葉〕



長谷川海太郎（函館市文学館蔵）

函館家具の誕生 (函館の洋風家具)

開国に伴い来日した外国人達は自分たちの生活様式を函館に求めた。仕事の基盤を築き、生活を支えるためには、建物のみならず、脚物・台物・箱物といわれる家具も必要とされた。

最初は祖国から運ばれたが、修理や同等品を作るうちに、それを請け負った函館の職人は洋風家具の仕組みを理解していく。木材の加工技術や木組みは日本が優れていたが、釘や金物や塗装など、当時の職人達には初めての経験で、驚きの連続だったろう。

家具を製作する際、スケッチなどを元に図面を起こしたようだが、物差しの単位は西歐式のインチ・フィートではなく、和家具指物で慣れ親しんだ寸や尺で作られた。開国から40年後には、函館の職人達が意匠や技法を競い合い、洋館にふさわしい様々な家具が地場で製作されたものと思われる。

平成23年に函館工業高校の生徒達によってコピー製作された旧函館区公会堂の飾り棚には、あふれんばかりの彫刻装飾が施されている。大群の魚や、連続の荒波、ロープの意匠などを盛り込み、新分野に挑んだ職人達の意気込みまでもが強く感じられる。なお公会堂に開館当初から設置された家具は、輸入ではなく、函館の職



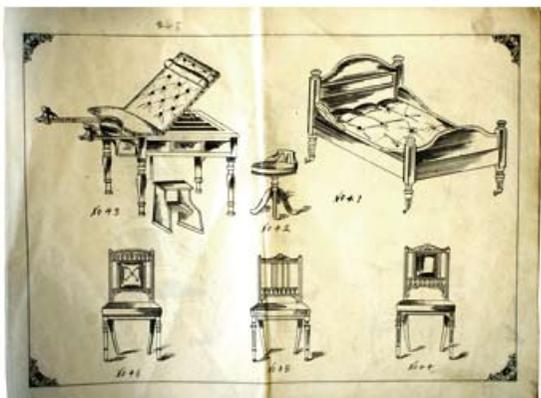
函工生の作品 (函館市地域交流まちづくりセンター)

人達が新しい意匠や技法の粋を集めて製作したものと思われる。ただ、現物は残っているが、誰がどの様にして製作したのかは明らかではない。

函館洋風家具は、その後、原因は様々考えられるが衰退し、独自の技術も各地へ流れた。旭川は、くり棒加工や彫刻加工など、函館洋風家具の流れを思わせる加工技術で、最近までカップボードなどの飾り棚が生産販売されていた。また洋風家具製作が同時期に始まった浦賀では今も技術が引き継がれ、「横浜家具」の名称で、地場産業として広く取引されている。

函館は、日本の家具の歴史の中で、横浜・神戸・長崎と並ぶ重要な位置を占めながらも歴史に埋もれてしまっているが、百年経た今も旧函館区公会堂に散逸せずに残っている様々な洋風家具は、建物と共に市民の貴重な財産である。

〔佐藤公治一佐藤家具店〕



函館・神永商店の洋家具・内装カタログ (明治43年頃)

洋食文化の浸透

明治16年(1883)平田文右衛門はアイスクリームを製造販売、ラムネは渡辺熊四郎、石垣隈太郎が成功を収める。明治後期には当別の男子修道院が経営安定のためバターやクッキーの製造を開始、これは今も観光土産の定番として有名である。大正13年(1924)にはカール・レイモンがハム、ソーセージの製造を始め、神戸、横浜にも販路を広げた。

開港間もなく外国人の要望で耕作が行われた馬鈴薯も、西欧農法の研究をした川田龍吉が明治41年、アイリッシュ・コブラー(別称男爵いも)という品種を自営の農場に導入、これは食文化のみならず農民の収入安定にも寄与している。

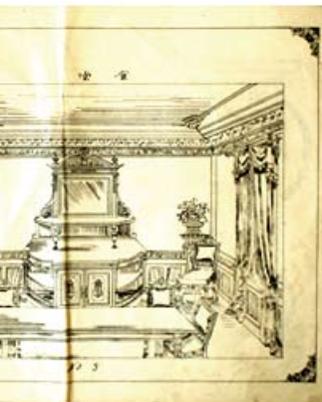
西洋料理店では、明治17年刊の『函館繁盛記・後編』に西浜町の森善、会所町の木村、大黒町の日出楼閣の名が見られ、その後も船場町の養和軒、会所町の新喜、末広町の五島軒、大町の保養軒、富岡町の万養軒、船場町の滋養軒が開業する。また、外人接待用の公館として元町に設けられた協同館は、明治12年の大火で類焼後函館公園内に再建され、西洋料理店として利用された。

大正時代になると末広町のライオン、八幡

坂上の函館ホテル食堂等西洋料理店は市内で50軒を数え、その頃実施された「函館の名産、名物を新聞読者の投票で選ぶ」という企画において、料理の部では市役所前の「ホメローのランチ」が選ばれている(大正12年8月18日付『函毎』)。ライオン食堂、五島軒等の高級店も出現し、特に五島軒は居留地外国人、官吏、紳商などの歓送迎会、結婚披露宴等に利用され、現在まで名門の看板を保っている。

昭和6年(1931)の新聞によると、森森屋デパートの食堂は平日750人以上、土日には約1000人の家族や母子連れに利用され、その40%は洋食を食べる人達だったという。

[佐藤]



献立	材料
パン	パン
ポテトスープ	じゃが芋 スープストック
ビーフカツレツ	牛肉 小麦粉 卵
	パン粉 揚油(ヘッド)
ロールキャベージ	キャベツ 挽き肉 玉葱
チキンライス	鶏 米
セーゴプディング	牛乳 卵 砂糖
紅茶	紅茶

五島軒「明治39年9月第9回食道楽会」のメニュー
 (『月刊食道楽』第2巻第13号より)

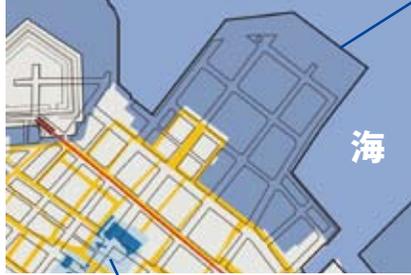
外国人居留地 ガイドマップ

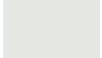


- 大町以外の居留地 ①ロシア領事館地②イギリス仮領事館地③イギリス領事館邸宅④アメリカ領事館地
 ⑤イギリス/トムソン(造船・商店)⑥ドイツ/シュルター(商店)⑦アメリカ/ウイスキー(フレイタ)(商店)
 ⑧ドイツ/ゲルトナー.C(商店)⑨イギリス/ブラキストン(商店)⑩アメリカ/メソデストエペス(司祭館宣教師)
 ⑪イギリス/デニング(司祭館宣教師)⑫フランス/教導社サルム・プリストム(司祭館)⑬フランス/聖
 保祿女学校⑭イギリス/アルフレッド・ハウル(商店)⑮清国/成記号(商店)⑯イギリス/ゼイムスウエリ
 アム(司祭館宣教師・ロシア病院跡)⑰アメリカ副領事館地

『箱館から函館へ(富原章)』収録の明治9年地図を参考に、外国人居留地や主要な建物を明示した往時の函館地図を再現し、そこに現在の函館地図を重ね合わせた居留地ガイドマップです。明治9年地図は明治11年・12年の各大火後の街区改正が行われる以前のもので、幕末から明治初期まで連綿と続き、開港の舞台となった函館の街並を伝えています。道路や海岸線の移り変わりにも興味深いものがあります。〔清水〕

凡例



-  現在の海岸線
-  明治9年の陸地
-  明治9年の道路
-  現在の道路
-  市電路線(現在)
-  外国人墓地
(明治9年頃)

明治9年当時の建物

民間による相対貸居留地 ①ロシア/アレクセフ・ソフィア(牧場・農園)
 ※地図の範囲外②アメリカ/ライス.E.E(居宅)③清国/福順号(商店)
 ④ブラキストン・マル社⑤イギリス/ハウル社(居宅・牧舎)⑥イギリス/
 ハウル社(居宅・牧舎)⑦イギリス/聖公会宣教師デニング.W 説教所⑧
 デンマーク/デユース.E.H(居宅)⑨イギリス/チャレス・レッドル(居宅)

大町居留地

旧地蔵町居留地



(この地内
一角と推定)

未広町

函館八幡宮

十字街

魚市場通

願乗寺
(現西本願寺
函館別院)

明治 11 年 (大火前) の函館の外国人居留地 (内務省・北海道開拓使調に基づく)

居留外国人数・商社数

イギリス人 20 名、フランス人 6 名、ロシア人 4 名、アメリカ人 3 名、デンマーク人 2 名、ドイツ人 2 名、清国人 35 名 計 72 名 商社 イギリス 2 社、清国 5 社

大町居留地 仲濱町 106・107 番地 総面積 1,730.381 坪

貸渡地 (国有地) 文久元 (1861) 4 月に 10 区画の借地権を貸渡

借地人名 (名義人) 計 4 件 4 名・社

ブラキストン.T (イギリス商人)、ハウル社 (イギリス商社・代表ウイルソン.J.A)、デューズ.J.H (デンマーク商人)、ピョートル.A (ロシア人・妻ソフィアがホテル経営)

旧地蔵町居留地 設定総面積 20,773 坪・69 区画 (清水調べ)

幕府が買収した民間の埋立地に増地し慶応 3 年 (1866)、居留地が完成。借地権の競売は不振で再び民間に払い下げられる。船場町・豊川町の一部が含まれる

大町以外の居留地 (国有地) 計 17 件、総面積 16,492.613 坪

(安政 6 年 2 月～明治 11 年 10 月に結ばれた契約)

①ロシア領事館地・上汐見町 123 ②イギリス仮領事館地・松陰町 3 ③イギリス領事館邸宅・松陰町 1 ④アメリカ領事館地・富岡町 14 ⑤イギリス/トムソン (造船・商店) 豊川町 92 ⑥ドイツ/シュルター (商店) 船場町 70 ⑦アメリカ/ウイスキー (フレイタ) (商店) 船場町 70 ⑧ドイツ/ゲルトナー.C (商店) 船場町 71 ⑨イギリス/ブラキストン (商店) 船場町 95 ⑩アメリカ/メソデストエペス (司祭館宣教師) 上汐見町 123-2 ⑪イギリス/デニング (司祭館宣教師) 坂町 83 ⑫フランス/教導社サルム・プリストム (司祭館) 上汐見町 124 ⑬フランス/聖保禄女学校・上汐見町 101-1 ⑭イギリス/アルフレッド・ハウル (商店) 船場町 68 ⑮清国/成記号 (商店) 仲濱町 94-9 ⑯イギリス/ゼイムスウエリアム (司祭館宣教師・ロシア病院跡) 上汐見町 117 ⑰アメリカ副領事館地・富岡町 1-4

民間による相対貸居留地 計 9 件、総面積 8,646.310 坪

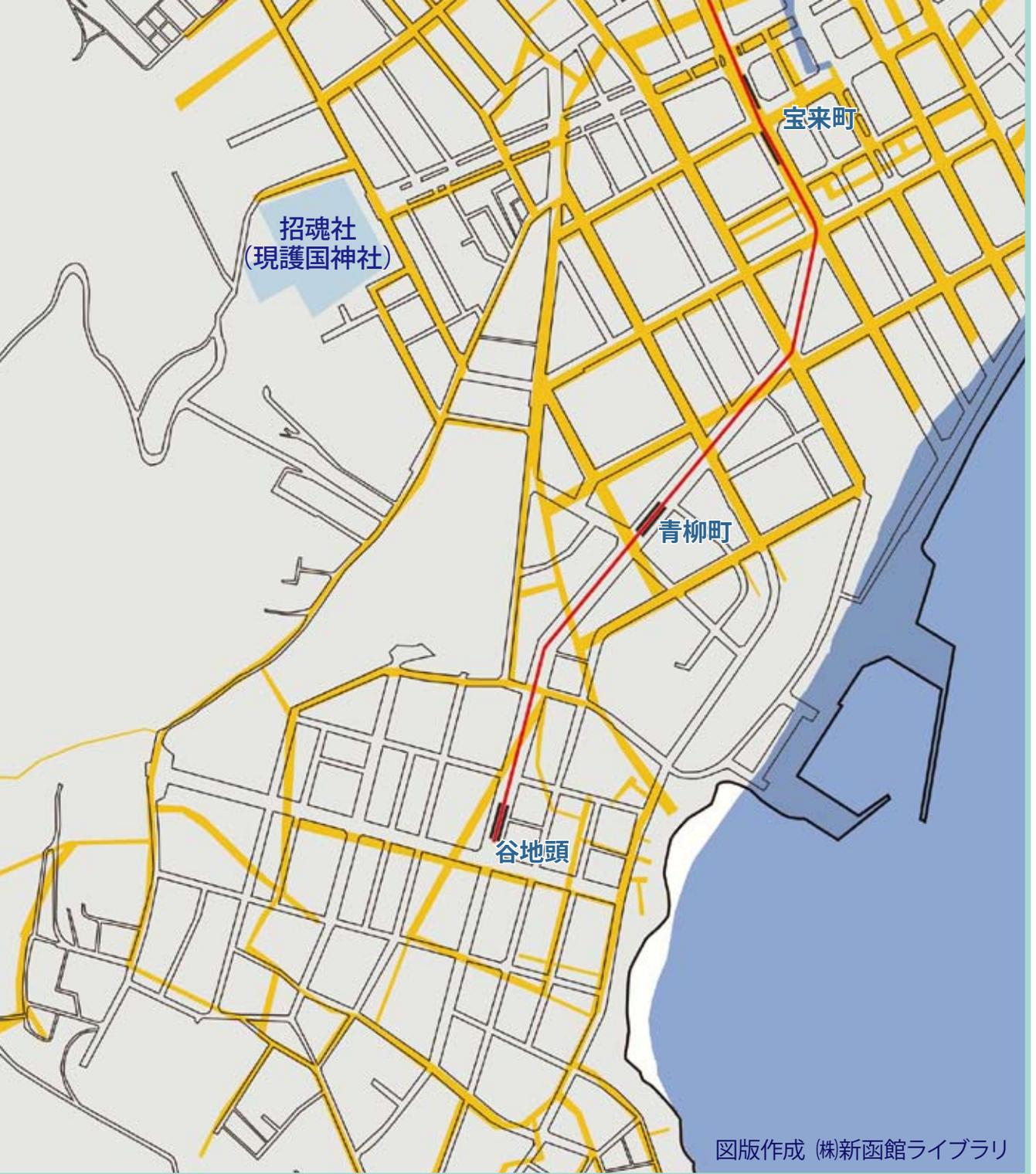
(慶応 3 年 6 月～明治 11 年 6 月間の契約)

①ロシア/アレクセフ・ソフィア (牧場・農園) 15 年間・海岸町 58 (地区の範囲外、現万代町グルメシティ) ②アメリカ/ライス.E.E (居宅) 15 年間・富岡町 15 の一部 ③清国/福順号 (商店) 10 年間・大町 64 ④ブラキストン・マル社 15 年間・豊川町 65 ⑤イギリス/ハウル社 (居宅・牧舎、商会代表はウイルソン) 10 年間・上新町 225 ⑥イギリス/ハウル社 (居宅・牧舎、商会代表はウイルソン) 10 年間・上新町 234 ⑦イギリス/聖公会宣教師デニング.W 説教所 20 年間・内潤町 3 ⑧デンマーク/デューズ.E.H (居宅) 20 年間・上汐見町 122 ⑨イギリス/チャレス・レッドル (居宅) 5 年間・松陰町 13

居留地総計 30 件 総面積 26,869.304 坪

※町名は旧町名 (契約書による)、商号・氏名等の表記は史料に即した

参考文献 『箱館から函館へ』 (富原章・函館文化会)、『函館の火災誌』 (富原章)、『箱館開港期に於ける築島と居留外国人』 (會田金吾)、『函館市史 通説編』 第一・二巻・三巻、年表編、リーフレット『はこだてと外国人居留地』 シリーズ (はこだて外国人居留地研究会)、『ビジュアル明治函館年表』 上・中 (小沼健太郎)、『全集 日本の食文化 8 異文化との接触と受容』 (石川 寛子・芳賀 登)、『資料西洋料理渡来四百年史』 (日吉良一編)、『グラント将軍訪日の記』 (『明治天皇』 ドナルド・キーンより)、『北の文明開化』 (早坂秀男・井上能孝)、新聞『北方婦人』 1～24 号、『道南女性史研究』 創刊号・12 号・17 号



参考史料 『函館市史史料編』第一・二巻(函館市)、『番外函館管内絵図(租税係)』『簿書(箱館奉行や北海道開拓使などの公文書録)』(北海道立文書館蔵)、『休明光記』羽太正養、『北海道人物資料 外国人 之部全』(河野常吉)、『函館繁盛記』(高須墨浦)、『日本近代思想大系 23』、『函館市西部地区の町並 元町・末広町地区伝統的建築物群調査報告 1983.3』、『同弁天町・弥生町地区 1984.3』(函館市)、東京大学史料編纂所『大日本古文書 幕末外国関係文書』巻 29-168、『長崎今昔 日本の洋食店の創始』(姫野順一)
デジタル・アーカイブ 函館市中央図書館、北海道大学附属図書館北方資料室、北海道立文書館、国立公文書館、同志社社史資料センター

CONTENTS

北日本唯一の開港都市となった箱館の諸相	1
開拓の拠点都市・函館と西洋文明	2
北洋漁業「函都」の繁栄の光と影	3
開港都市はこだての形成	4
開港による海岸道路（バンド）の形成	4
開港箱館と周縁の村々	6
開港期の西洋文明の諸相	8
「はこだて」の西洋建築の先駆者たち	8
ロシア流「写真術」を学んだ3人の箱館写真師たち	9
西洋料理店の始まりと洋食文化の摂取	10
新島襄も通院、ロシア病院が契機となった北海道の西洋医学	11
港町「はこだて」の移り変わり……	12
開港前〈箱館海岸図〉	12
開港〈自由貿易開港直後の箱館〉	16
全盛期〈函館案内漫画鳥瞰図〉	18
見なおされる歴史的街並	20
弁天・大町の商家の街並	20
道南・津軽に広がる洋風建築	21
〈随想〉ハイカラな函館・銀座通りを思う……	22
函館の往時の気風を象徴する、関根要太郎の作品群	23
「エトランゼのマチ ハコダテ」の西洋文化の諸相	24
「北方婦人」にかかわった、函館の“ハイカラ”女性たち	24
函館の風土から生まれたコスモポリタン 長谷川兄弟	25
函館家具の誕生（函館の洋風家具）	26
洋食文化の浸透	27
外国人居留地ガイドマップ	28

はこだてと 外国人居留地

街並・文化編

はこだて外国人居留地研究会(代表:岸甫一)

平成25(2013)年2月1日発行

